自由と不自由（1）

（次の文章は、筆者が大学の授業で行った課題について述べたものです。筆者は芸術を生み出す心について研究しており、あるとき学生に新聞紙と雑誌だけでちぎり絵をつくる課題を出しました。）

最初は、材料だけを制限して、テーマは「自由」に設定していた。でもそうすると、※大学生でもキャラクターものが多くなる。そこで、テーマにも枠（わく）を与（あた）えることにした。※モチーフは植物に限定する。それも「もしも自分が植物だったら、こんな植物」という※むちゃぶりだ。すぐに好きな植物が思い浮（う）かび、図鑑（ずかん）などで形を確認（かくにん）しながら制作に入った学生もいたが、なんとなく好きな色を集めているうちに形になった、という学生もいた。ヒマワリ、ユリ、バラなどの花をはじめ、さまざまな種類の草花、木、食虫植物、海藻（かいそう）、くだものに野菜、想像上の植物も出てきた。

できあがった作品を廊下（ろうか）に展示した。自画像は、自分がさらされるようで気恥（は）ずかしいものだが、身代わりの植物ならあまり恥ずかしくない。でも、その人らしさは、植物の種類だけでなく、ちぎり方にも表れていた。几帳面（きちょうめん）にちぎって細部まで表現したものがあれば、大胆（だいたん）にちぎって、もとの写真や文字を※テクスチャとして活（い）かした※コラージュ風のものもあった。

こうして課題を試（ため）すうちに、案外、枠を与えた方が学生もやる気を出すことがわかって、調子にのって無理難題を考えるようになった。限られた材料や、むちゃぶりテーマだと、上手（じょうず）・下手（へた）の問題よりも、アイデアや工夫（くふう）の力がものをいう。

逆説的だが、不自由な方が自由になれるのかもしれない。すべてが自由だといわれると、無重量空間にぽんと放り出されたような不安な気分になる。でもそこに枠があると、とっかかりができる。こわしやすい簡単な枠があれば、思いきり枠をこわせるのだ。そうして枠をこわすのが気持ちいいのは、こわすという行為（こうい）のなかに「自由」を感じるからなのではないか。

（齋藤亜矢『ルビンのツボ――芸術する体と心』岩波書店　所収
「自由と不自由」による）

※大学生でも〜…この授業でテーマを自由に設定したところ、キャラクターもののちぎり絵ばかりになってしまった。

モチーフ…ここでは、主題を構成するもの。　　むちゃぶり…無理難題を投げかけること。

テクスチャ…表面の質感。

コラージュ…画面をさまざまなものの切り貼りで構成した芸術作品。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中には、筆者の経験したことと、経験をもとに筆者が考えたことが記されている。筆者が考えたことが中心に述べられている段落を探し、その最初の三字を答えなさい。

[　][　][　]

(2) 筆者が大学の授業で行った課題について、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 筆者は最初、ちぎり絵の材料を制限していたが、学生のアイデアを引き出すために材料を自由にした。

イ モチーフを植物に限定したところ、できあがったちぎり絵は、その人らしさがないものになった。

ウ 授業で行った課題を通して、何かしらの枠が設定されているほうが学生はやる気になることがわかった。

〔　〕

(3) 筆者の考えに合うものを選びなさい。

ア 枠という制限があることで、かえってその枠をこわし、自由になれることがある。

イ 自由というものは不安な気分をおこさせるものなので、人は常に枠を守っているべきである。

ウ こわすという行為のなかにこそ自由があり、枠のように不自由なものを設定すべきではない。

〔　〕